

い  
た  
だ  
き  
ま  
す  
を  
一  
緒  
に

【あらすじ】

大学生の桐野未羽（19）は人前で食事をすることに強い不安を持つ『会食恐怖症』を抱えている。大学では昼食を一人で食べ、おらずと人との交流も避けていた。ある日未羽のバイト先の定食屋に、同じサークルの遠藤衣織（19）が偶然来店する。華奢な衣織だが頼んだのは大盛り。衣織は他人の前では大食いであることを隠し、少食のフリをしていた。お互いの秘密を知った二人。未羽は会食恐怖症を克服するため、衣織は我慢せず好きな量を食べるために昼食と一緒に食べるようになる。未羽は同級生の林田柊真（19）に好意を抱いているが、柊真からの食事の誘いを断り続けていた。衣織はそんな未羽を励まし続けるが、未羽は拒絶し二人の関係がギクシャクする。一人になった未羽は、思い切った会食恐怖症当事者たちのオフ会に参加する。話しているうちに衣織が励ましてくれたあり

がたさを痛感し、謝りに行く。そして衣織が大食いを隠していたのはからかわれた過去があり、未羽と同じように人前で食べることに不安を抱いていたと知る。お互いに寄り添うようになった未羽と衣織。衣織と食事するおかげで慣れてきた未羽は、サークルの食事会に参加する。だが症状が強く出てしまい、食事が喉を通らなくなってしまった。そこで未羽を助けたのは衣織だった。衣織は人前にも関わらず、未羽の残した分を平らげた。引かれると心配していたが、周囲は称賛。衣織に勇気をもたらった未羽は、柗真に会食恐怖症であることを打ち明ける。一生懸命伝えるが、柗真は「分からない」と言い立ち去る。それでも、伝えてよかったと言う未羽を、衣織は慰める。そこに、柗真と一緒に食事をするためにやってくる。「分からないけど、分かるうとすることはできる」という柗真の言葉に涙を流す未羽。その後、未羽は昼食を衣織と

ともにサークル仲間たちと過ごすように。一  
緒に「いただきます」と言うのだった。

【登場人物】

桐野 未羽 (19) 大学生

遠藤 衣織 (19) 大学生

林田 柊真 (19) 大学生。サークル

仲間

久保 陸 (19) 大学生

はろ (28) 会社員

井上 都 (19) 大学生。サークル

仲間

加藤 沙耶 (19) 大学生。サークル

仲間

新田 隼人 (19) 衣織の元彼

桐野 静子 (45) 未羽の母親

男子学生 1・2

店長

○大学・サークル棟・部室

数人の男女が輪になって談笑している。

輪の中に、桐野未羽（19）と林田柊真

（19）がいる。

柊真「俺、いっぱい食べる子好きなんだよね」

未羽、「え」と硬直する。

男子学生1「分かる！ 女の子が頬張ってる

のとか可愛いよなあ」

井上都（19）と加藤沙耶（19）、顔を

見合わせる。

都「少食な方がモテるんじゃないの？ 桐野

さんみたいな」

未羽、小さく息を呑む。

沙耶「かわいいんだよ、桐野さん。この前ま

じ赤ちゃんの量しか食べれなくて」

一同、笑う。

未羽、チラッと柊真を見ると、みんな

と一緒に笑っている柊真。

都「ほとんど残してたよね」

未羽「その日は朝食べ過ぎちゃって……」

沙耶「衣織も少食じゃない？」

会話に参加していなかった遠藤衣織

(16)、我に返って、

衣織「んー？ かなあ」

沙耶「だから細いんだろうけど。羨ましー」

衣織「……あははー」

未羽、チラッと衣織を見る。

目が合い、慌てて目をそらす。

男子学生1「あ、そろそろ昼食へ行こ」

柊真「そうだね」

一同、立ち上がり出て行く。

○同・廊下

歩いている一同。

未羽、ふと足を止める。

未羽「私学務行かないとだから、ここで」

柊真「じゃあ席取っとくよ。用事終わったら

未羽ちゃんも一緒に食べよう」

未羽「あー、えっと……。二限の前に食べてきたんだ。だから、大丈夫」

柗真「そうなんだ。じゃあ、またね」

歩いて行く一同。

未羽「……」

未羽、『学務課』の案内看板とは別方向に歩いていく。

一同と歩いていた衣織、ふと振り返り

未羽の背中を見つめる。

○同・講義室

未羽、誰もいない講義室に入ってくる。

長机の端に座り、お弁当を広げる。

未羽「……いただきます」

未羽、黙々と弁当を食べる。

○タイトル

『いただきますを一緒に』

○大学・食堂

昼食をとっている男女グループ。

衣織のトレイには、小ライスと少量の

おかずだけ乗っている。

衣織「いただきますーす」

都「安定の小ライスだね。足りるの？」

衣織「（笑顔を作って）ちようどいいよー」

○同・中庭（夕）

歩いている未羽。

柊真、未羽を追いかけてくる。

柊真「未羽ちゃん！」

未羽「あ、林田くん」

柊真「お昼、大丈夫だった？ 学務課混んでたでしょ」

未羽「あー、うん。混んでたかも」

柊真「だよね、お疲れ様。……あのさー、お腹とか空いてない？」

微かに震える未羽の手。

柊真「よかったら一緒にご飯行かない？」

未羽「……ごめん」

柊真「あ！ いや！ そうだよね！ いきなり二人とか嫌だよね」



未羽「ううん！ 違うんだけど……ごめん」

柊真「全然！ 急に誘っちゃってごめんね。

ただ未羽ちゃんと一緒においしいものいっ

ぱい食べたいなって思ってた」

未羽「ごめん……」

柊真「全然！ 全然！ 気にしないで！」

未羽「（表情が暗くなって）……うん」

○街中（夕）

暗い顔で歩いている未羽。

ふとカフェを見ると、テラス席で楽し

そうに食事をしているカップル。

未羽「（見つめて）……」

○定食屋・厨房（日替わり）

エプロン姿の未羽、洗い物をしている。

店長「はい、フライ定食大盛りー」

店長、調理台に出来上がった大盛り定

食を置く。

未羽、洗い物をやめて調理台に向かう。

定食が乗ったトレーを持って、

未羽「うわ」

店長「すごいでしょ。うちで一番ポリューミ  
ー。でも注文したお客さん……」

○同・店内

未羽、大盛り定食を運んでくる。

未羽「お待たせしましたー」

席に座っていたのは衣織。

衣織「え」

未羽「え。遠藤さん？」

未羽、大盛りの定食を見つめる。

未羽「ミックスフライ定食、ライス大盛り。

……ご注文、お間違いないですか？」

衣織「……ないです」

未羽、大盛り定食を衣織の前に置く。

衣織「……桐野さんここでバイトしてたんだ」

未羽「うん。家がこっちの方で」

衣織「そういうパターンか……」

衣織、頭を抱える。

通りがかった店長、未羽と衣織を見て、

店長「桐野ちゃん？　どうかした？」

未羽「あ、いや、えっと、大学の、同じサー

クルで……」

店長「ああ、そうだったんだ！　じゃあ桐野

ちゃんも一緒に食べちゃえば？」

未羽「え」

店長「いつも食べないで帰るけど、うちまか

ないタダなんだしさ。持ってくるねー」

未羽「いや、あの……」

未羽・衣織、顔を見合わせて困惑の表情。  
情。

× × ×

向かい合って座っている未羽と衣織。

衣織、大盛りの定食をあっという間に

平らげる。

未羽、まかないのどんぶりを前にして

硬直している。

箸を動かしているが全然減っていない。

店長、通りがかって、

店長「どう？　おいしいでしょ？」

未羽「え、あ、はい……」

店長「食べたら上がっていいから」

店長、厨房に向かう。

未羽、箸を持つ手が震える。

衣織「……お腹いっぱい？」

未羽「あ、えっと……」

衣織「私食べようか。残しにくいでしょ」

未羽「でも遠藤さん少食なのに」

衣織「いやフライ定食大盛りが少食なわけあるかーい。実はめっちゃ大食いです」

未羽「……え？」

衣織「……ごめん、滑ったね」

衣織、未羽のどんぶりを取って、食べ

残しをぺろりと完食する。

ぽかんとしている未羽。

○同・店前

私服の未羽・衣織、出てくる。

衣織「……じゃあ」

衣織、歩き出そうとする。

未羽「あの、ごめんなさい。食べ残しを……」

衣織「いやいや全然大丈夫。お腹いっぱいなら仕方な——」

「ぐう！」と未羽のお腹が鳴る。

衣織「へ？」

未羽、目が泳ぐ。

衣織「あー……。あははー。まあ、ね。人には好き嫌いもあるし」

未羽「——違うの。すごく、おいしかったの」

衣織「あ、そうなの？ ごめん、私食べちゃって」

未羽「ううん、違って……。その、私、食べたくても、食べれなくて。……一緒だと」

未羽、小さく息を吐いてから、

未羽「……私、会食恐怖症なんだ」  
泣きそうになる未羽。

衣織「（慌てて）え、ちょっ！」

○公園

ベンチに座っている未羽と衣織。

衣織「落ち着いた？」

未羽「うん……。ごめん」

衣織「で、えっと、外食恐怖症だったけ？」

未羽「会食。まあ外食ってことでもあるんだけど。……人前だと緊張して、食べれなくなるの。どんなにお腹空いても、好きなものでも、喉がきゅっと詰まる感じがして、一口も通らなくなる」

衣織「そういうのがあるんだ。ごめん、私

あんま知らなくて」

未羽「ううん。普通そうだよね」

衣織「まあでも、そういう理由なら全然無理しないでもいいというか」

未羽、首を横に振る。

未羽「治さなきゃいけないとは思ってるんだ。さつきみたいに迷惑かけちゃうし」

衣織「全然迷惑なんかじゃ」

未羽「それに……。私も、みんなと一緒に食べたい」

うつむく未羽を見つめる衣織。

衣織「（ふと気づいて）あのさあ……」

○大学・講義室（日替わり）

未羽・衣織、入ってくる。

他には誰もいない。

衣織「いつもここで食べてるの？」

未羽「うん。一人になれるから」

未羽・衣織、横並びに座る。

未羽、机にお弁当を広げる。

衣織、机におにぎり五個とパン三個を

置く。

未羽「ごめんね、遠藤さん。付き合ってもら  
って」

衣織「いいのいいの。ていうか衣織でいいよ」

未羽「（はにかんで）衣織、ちゃん」

衣織「（はにかんで）うん、未羽ちゃん。未

羽ちゃんは人と一緒に食べる練習ができる。

私は少食のフリしなくて済む。私たちいい

コンビかもね」

衣織、未羽にニコツと笑いかける。

衣織「あ、でも全然無理しないでね」

未羽「うん。でもこうして横並びだとちよつとマシになるから」

衣織「へえ。じゃあ、いただきます」

未羽「いただきます」

衣織、ぱくぱくとおにぎりを食べ始める。  
る。

未羽、恐る恐る米を口に入れて、ゆっくりと咀嚼する。

衣織「（前を向いたまま食べながら）未羽ちゃん  
のバイト先らへんっておいしいところ多  
いよね」

未羽「（我に返って）へ。あ、そうなんだ。  
あの辺よく来るの？」

衣織「うん。ご飯屋さんはね。やっぱり大学の  
近くだと知り合いに会っちゃうかもしれな  
いからさ」

未羽「……あの、聞いていいかわからない  
んだけど、衣織ちゃんはどうして大食いなの



隠すの？　たくさん食べれるっていいこと  
じゃない？」

衣織「……自分で言うことではないんだけど、  
私細いじゃん？　だから少食に見られて。  
なのにみんなの前でめっちゃ食べたら引か  
れるでしょ？」

未羽「そんな、気にすることないと思うけど」  
衣織「（笑って）その気にするなっていうの  
が一番難しいんだよね」

未羽「……ごめん」  
衣織「ううん、全然。自分でも気にしなきゃ  
いいだけなの。ってのは分かってるから」  
未羽「分かっているけど、気にしちゃうんだよ  
ね。……私も同じ」

衣織、未羽を見る。

未羽「自分の食べ方とか、食べる量とか、変  
に思われてるんじゃないかって気になっ  
ちゃう。そんなことないのにね。人の目が気  
になって、食べるのが怖くなる」

未羽、箸を持つ手が震える。

未羽「普通誰かと食べるって楽しいものなの  
に」

衣織、震える未羽の手に触れる。

衣織「大丈夫だよ。絶対いつか治るよ」

衣織、微笑む。

未羽「……うん」

### ○桐野家・未羽の部屋（夜）

未羽、ノートパソコンでレポートを書  
いている。

スマホの着信音。

未羽、スマホを見ると、衣織からU R  
Lが送られてきている。

衣織（メッセージ）「会食恐怖症の人のS N  
Sだって！ 知ってた？」

未羽、U R Lを開くと、『はろ@会食  
恐怖症』のS N Sが表示される。

未羽はすでにフォロー済みだった。

衣織（メッセージ）「この人もよくなってき  
たって言ってるし、大丈夫だよ！」

未羽「（画面を見つめて）……」

○同・台所（夜）

未羽、入ってきて冷蔵庫を開ける。

料理をしていた桐野静子（55）、気づいて、

静子「あ、未羽。夜ご飯で卵全部使っちゃっていい？ それとも明日のお弁当で使う？」

未羽「あー、使うかな」

未羽、冷蔵庫からペットボトルの水を取り出す。

静子「そう。じゃあ取っとくよ。たまには学食行ったらいいのに。毎朝作ってくの大変でしょ？」

未羽「うん、まあ」

静子「お友達は学食なんじゃないの？」

未羽、目をそらし黙って水を飲む。

静子「何、もしかしてまた一人で食べてるの？」

未羽「……うん」

静子「中学で男の子にちまちま食べてるって  
からかわれたんだっけ？ もうそんなの気  
にしなくていいのに」

未羽「分かってるよ……」

静子「未羽の食べ方なんて、誰も見てないよ。  
全然変じゃないし。ね？ これから社会に  
出たらもっと会食の機会を増えるんだよ？」

未羽「うん」

静子「やっぱり一緒に食事をするっていうの  
で人は仲を深めていくんだからさ。家では  
普通に食べれてるんだから、未羽が気にし  
すぎなだけ」

未羽「うん……」

未羽、うつむく。

○同・売店（日替わり）

買い物をする学生で賑わっている。

未羽・衣織、おにぎりを見ている。

衣織「その人は自分で持ってきたお弁当が一  
番ハードル低いんだって。未羽ちゃんも？」

未羽「確かに分かるかも。自分で作ってるから残しちゃいけないってプレッシャーがそこまでないっていうか。作るときに量も調整できるし」

衣織「なるほどねえ。てか自分で作れるのすごいな。私全然無理だから食べに行くか買うかしかなくて」

衣織、おにぎりを二つ手に取り、三つ目に手を伸ばそうとする。

近くで男子学生の笑い声がする。

ビクツとする衣織。

伸ばしていた手を引っ込める。

未羽「衣織ちゃん？」

衣織「（笑顔を作って）これに決めたー」

○同・中庭

歩いている未羽と衣織。

衣織「あとは家族とだったら平気とか」

未羽「うん。家族とは普通に外食もできる」

衣織「へえ、そうなんだ」

未羽「だから、親にも分かってもらえなくて、  
気にしすぎだって。親でもそうなんだから、  
他の人は……」

歩いてきた柗真、気づいて、

柗真「おー、お疲れ」

衣織「あ、柗真。お疲れー」

未羽、柗真から目をそらす。

柗真「あの、未羽ちゃん。ちょっといい？」

未羽「……うん」

衣織、未羽と柗真から離れる。

柗真「あの、この前ご飯誘ったの、ほんとに

全然気にしないでね。忘れていいから」

未羽「え……」

柗真「あの行きたいのは本当なんだけど、未

羽ちゃんの気持ちが一番だし」

未羽「私もー」

未羽、柗真を見るが言葉に詰まる。

柗真「うん？」

未羽「……ごめん。もうちょっと、待ってて

ほしい」

未羽、柗真を見つめる。

柗真「（はにかんで）あ、うん！ 待ってる！」

衣織、二人を見て笑う。

○同・講義室（日替わり）

並んで昼食を取っている未羽と衣織。

未羽の前にはお弁当、衣織の前には大きなおにぎりが置いてある。

衣織「ご飯、行けるといいね。柗真と」

未羽「へ！ あ、ああ、うん……」

衣織「もう大丈夫だと思うけどなあ。最近リラックスして食べてる感じするし」

未羽「大丈夫、かな……。でも、ダメだった時のこと考えると、どうしても怖くて。残した時になんか言われちゃったらどうしよう、とか」

衣織「なんかかって？」

未羽「残すな、とか。本当にその通りだから申し訳ないし」

衣織「誰も言わないと思うけど。だからサークルのご飯会も来なくなっちゃったの？」  
未羽「……うん。でもこんなふうには逃げてるから、いつまでもみんなと打ち解けられないんだよね。分かっているんだけど……」

都・沙耶、入ってくる。

都「あれ、衣織？」

ビクツとする未羽。

都「桐野さんも。二人で食べてたの？」

衣織「あー、うん」

沙耶「珍しい組み合わせ。仲良かったんだ？」

都・沙耶、近づいてくる。

衣織、おにぎりを机の下に隠す。

沙耶「うちらもここで食べていい？ 食堂席

無くてさー」

都・沙耶、未羽・衣織の対面の席に座りパンを食べ始める。

都「桐野さんてお弁当なんだ。自分で作っ

てんの？」

未羽「うん」



衣織、未羽をチラッと見る。

未羽、笑顔が引きつっている。

沙耶「えー、すご。おいしそう」

都「私も入学したての時は作ろうとしたんだけどさ、もうめんどくさくて学食か購買」

沙耶「分かるー。てかお弁当きれいじゃな

い？ 料理得意なんだ？」

未羽「そう、かな？」

都「あ、話しかけてごめんね。全然、気にせず食べて」

沙耶「食べて食べて」

未羽「うん……」

未羽、卵焼きを取り、少し食べる。

都「一口ちっちゃ！」

沙耶「小動物みたい。かわいいー」

未羽「あはは……」

未羽、箸を持つ手が震える。

男子学生、入ってくる。

男子学生「あれ、ここにいた」

都「うん？ どうした？」

男子学生「次の発表のさー」

沙耶「はいはい」

都・沙耶、席を立ち男子学生の元に向

かう。

衣織「（こそっと）大丈夫、食べるよ」

未羽「え？ でも」

衣織、未羽の箸を受け取り、あっとい

う間に弁当を空にする。

都・沙耶、戻ってくる。

衣織、慌てて食べたので咳き込む。

都「え、何？ 詰まった？」

衣織「（咳き込みながら）平気、平気」

都「てか次発表でさー」

沙耶「まじうちら超貢献してるからね？」

談笑する衣織・都・沙耶。

未羽、うつむく。

○同・中庭

歩いている未羽と衣織。

未羽「ごめんね。また食べてもらって」

衣織「足りなかったし、ちょうどよかったよ」

未羽「ごめん……」

衣織「でも食べたとか、食べてないとか、二

人ともそんな気にしてなかったでしょ？

だからほんと、大丈夫なんだよ。柊真との

ご飯もさ、普通に行けると思うよ。大丈夫」

未羽「（ぼそっと）大丈夫じゃないよ」

衣織「もし食べきれなくても柊真食べてくれ

るんじゃない？ あの人も結構大食いだし」

未羽「……嫌われちゃう」

衣織「え？ そんなことないでしょ」

未羽「……昔は、そこまでひどくなかったん

だ。緊張はするけど、お昼とか普通に友達

と食べてたし」

衣織「うん」

未羽「高校の時付き合ってた彼氏とも、よく

食べに行ったりしてた。不安が強い時は食

べきれなかった分、食べてもらったりして

て。楽しかったんだ、人と一緒に食べるの。

でも途中から」

未羽、立ち止まる。

衣織「未羽ちゃん？」

未羽「――俺はお前の残飯処理係じゃないって言われたの。私が甘えすぎちゃってたのが本当に申し訳なくて。食べれなくなって人に迷惑をかけるんだってそのとき気づいたの」

衣織「うーん……。でもそれはその人とは分  
かり合えなかっただけで、そういう人ばっ  
かりじゃないんじゃない？ 大丈夫だよ」

未羽、小さく首を横に振る。

衣織「（笑顔で）ね？ 大丈夫だって！」

未羽「――大丈夫なんて言わないで！」

ビクツとする衣織。

未羽「全然、大丈夫じゃないから。衣織ちゃんはいっぱい食べれるから、そんなふうに言えるんだよ。一緒に食べるのが怖いなんて気持ち、分かんないでしょ？」

衣織、未羽をじっと見つめる。

未羽「衣織ちゃんには分かんないよ……」

衣織「……じゃあ、そっちは私の気持ちわか

んの？」

未羽「え？」

衣織「（そっけなく）大丈夫だから大丈夫って言ったただけなんだけどな。なんかごめん」

未羽「あ……。あの衣織ちゃー」

衣織「じゃあね」

衣織、歩いていく。

○同・サークル棟・部室（日替わり）

談笑している男女グループ。

男子学生1「今日外食べに行かね？」

沙耶「いいねー。私気になってるところあって」

未羽、こそそと出て行こうとする。

ふと衣織と目が合うが、そらす衣織。

未羽、うつむいて出て行く。

柊真、未羽を気にする。

都「衣織も行くでしょ？」

衣織「（笑顔を作って）うん」

○同・講義室

誰もいない講義室に未羽一人。

お弁当を広げて、

未羽「……いただきます」

○ファミレス・店内

テーブル席に座っている男女グループ。

テーブルにはおいしそうな料理が並んでいる。

都「やっぱ衣織は少食だねー」

男子学生1「（笑って）この見た目で大食いだったらびびるでしょ」

衣織の前には量が少ない料理。

衣織「……いただきます」

柊真「（ぼそっと）未羽ちゃんも誘えばよかったかな」

都「桐野さん？ あの子いつも来ないよね」

沙耶「友達作りたくない系なのかな。衣織なんか知ってる？」

衣織「……分かんない」

○大学・食堂前（日替わり）

未羽、通りがかる。

食堂の方を見ると、楽しそうに食事している学生たちの姿が見える。

深呼吸して、スマホを取り出す。

未羽「（ぼそっと）大丈夫……」

未羽、操作する。

○カフェ・店内（日替わり）

未羽、周囲をキョロキョロ見回しながら入ってくる。

男女グループが集まる席にいたはろ

（28）、気づいて、

はろ「あの、もしかしてDMくれた……」

未羽「はい。未羽です。あの……」

はろ「こんにちは、初めまして。はろです」

未羽、緊張気味に会釈する。

× × ×

男女グループに交じって座っている未羽。

メニューを険しい表情で見つめている。

はろ「(気づいて)メニュー選んで難しいよね。多くないかな、食べやすいかなって悩んでなかなか決められない」

未羽「(恥ずかしそうに)はい……」

はろ「大丈夫、ゆっくり選んで。みんな気持ち分かるから」

未羽、チラッと隣を見る。

隣の席の久保陸(16)、微笑んで頷く。

陸「飲み物だけ、とかでもいいんですよ。全然周りに合わせる必要ないんです」

はろ「そうそう。これは少しずつ会食に慣れていこうっていう、会食恐怖症のためのオフ会なんだから」

未羽「(安堵して)はい」

× × ×

テーブルの上には各々が注文した飲み物やパンなどが並んでいる。

はろ「えー、今回初参加の方がいます」

未羽「未羽です。よろしく願います。は



ろさんのアカウントは前々から見てたんですが、初めて参加させていただきます」

はろ「じゃあ軽く自己紹介でもしましょうか。まず、一応主催のはろです。会社員してます。会食恐怖症と自覚したのは大学生のときで」

未羽、はろをじっと見つめる。

はろ「みんなと一緒に場で食べることに苦手意識を持ったのは小学生です。よく給食残して怒られる子どもだったので」

頷き共感しているグループの人々。

女性「たっちゃんです。主婦です。私は体調不良で食事中吐いてしまったことがあって。それから戻してしまいうんじゃないかと不安になって。なので嘔吐恐怖症もあります」

陸「陸です。大学一年生です。僕の場合は父が、男ならたくさん食べるべきって考えの人で。残すのは悪、みたいな。マナーにも厳しかったので人前で食べることに緊張するようになって」

話に聞き入っている未羽。

陸「あ、でもおかげでめっちゃ豆掴み上手い  
です」

笑う一同。

未羽、陸と目が合って微笑む。

○同・店前

出てきた一同。

男性「気持ち分かる人と一緒っていうのだ  
と、だいぶ気が楽でしょ」

未羽「はい」

女性「また集まりましたよね」

男性・女性、歩いていく。

はろ・陸、未羽に近づいて、

はろ「どうだった？ 未羽ちゃん、オフ会に  
は抵抗あったって言ってたけど」

陸「そうなんですか？」

未羽「……私、何をしたってどうせ変われな  
いって思ってたんです。大丈夫にはなれな  
いって」

陸「大丈夫……」

はろ「気にしすぎなだけだから大丈夫、緊張  
しなくて大丈夫。（笑って）よく言われる  
よね」

未羽「（苦笑いで）はい」

陸「大丈夫って、無責任な言葉ですよね」

未羽「……」

陸「でも、その言葉でどれだけ救われるか」

ハッとする未羽

× × ×

（フラッシュユ）

衣織「（笑顔で）ね？ 大丈夫だって！」

× × ×

はろ「そうそう。だって今日どうだった？」

未羽「すごく楽しかったです。ジュース一杯  
しか飲めなかったけど」

はろ「ジュース一杯も、飲めたんだよ。一応  
会食の場だったけど、楽しめたなら大きな  
一歩だと思うよ」

陸「（微笑んで）大丈夫だったでしょ？」

未羽「（微笑んで）はい」

○大学・食堂（日替わり）

昼時で混雑している食堂。

衣織、一人で小サイズのそばを食べている。

未羽、小サイズのそばが乗ったトレイを持って、衣織の前に座る。

衣織「え？」

未羽「この間はごめんなさい。私、すごく自分勝手だった。衣織ちゃんは私に寄り添ってくれたのに自分のことだけでいっぱいになって」

衣織「あ、いや、うん。え、ていうか大丈夫なの？ 人結構いるけど」

未羽、衣織をまっすぐ見つめて、

未羽「一緒に食べたかったから」

衣織「……」

未羽「衣織ちゃん、本当にごめん」

衣織「……いいよ。私もなんか変に意地にな

「っちゃってたし」

未羽「衣織ちゃん……」

衣織「ほら食べよ、伸びちゃう。いただきますす。あ、でも無理はしないでね」

未羽「うん、ありがとう。……いただきます」

未羽、食べ始めるが、周囲の音がだんだんと大きく聞こえるようになる。

箸を持つ手が震える。

× × ×

ピークが過ぎ、人が少なくなった食堂。とつくに食べ終わっている衣織。

未羽、緊張した面持ちでゆっくりと食べている。

衣織「食べようか？」

未羽「でも」

衣織「私は別に残飯処理係とか思っていないから。ただ、友達の助けになりたいだけ」

衣織、未羽から器を受け取り食べる。

未羽「……ありがとう」

衣織「（笑顔で）ううん」

未羽「やっぱり、たくさん食べれる衣織ちゃんってすごいよ。みんな引いたりなんかしないと思うけど」

衣織「……私——」

新田隼人（19）、衣織に近づく。

隼人「あれ衣織じゃん」

衣織「あー……」

男子学生2、隼人の後ろから歩いてきて、

男子学生2「何？ 知り合い？」

衣織「（未羽に）高校同じで」

隼人「（男子学生に）元カノ」

男子学生2「へー」

衣織、気まずそうに視線を外す。

隼人「てか見たよー？」

衣織「は？」

隼人「その子の飯、奪って食ってたしょ。高校んときから変わってないなー。相変わら  
ずで引くわ」

衣織、小さく息を呑む。

未羽「いや衣織ちゃんは」

隼人「（男子学生2に）こいつめっちゃ食うんよ。普通に牛丼特盛三杯とかいくからね」

男子学生2「まじ？ こんな細いのにな？」

男子学生2、衣織をじろじろ見る。

衣織、うつむく。

隼人「そうなんだよ。でも俺より食うんだよ」

衣織「（ぼそっと）やめて」

隼人「まじ一緒に飯行くの恥ずかしかったわ

ー。今でもライス大盛りとかで食べてんの？ いや、引くわー。やばくね？」

衣織、黙ったままうつむいている。

未羽、勢いよく立ち上がり、

未羽「ーやばくない！」

ビクツとする隼人と男子学生2。

衣織、驚いて顔を上げる。

未羽「やばくないです！ 衣織ちゃんと一緒に食べるの全然恥ずかしくないですから！」

隼人「（半笑いで）は？ え？ 急にキレられたんですけど」

男子学生2「いいって。もう行こう」

隼人「意味分かんないんですけど」

隼人・男子学生2、逃げるように去る。

未羽「大丈夫だよ、衣織ちゃん。大丈夫。あ、

大丈夫って言っちゃった。ごめん」

衣織「ああ……」

未羽「でも、本当に大丈夫なんかもん。衣織

ちゃんがたくさん食べてもそんなの、全然

関係ない。衣織ちゃんと一緒に食べたい。

だから、大丈夫だよ」

未羽、震える手で衣織の手を握る。

衣織、未羽の手を見つめる。

### ○同・廊下

並んで歩いている未羽と衣織。

衣織「いくら食べても太らない体質なんだよ

ね。だから見た目とのギャップがすごいっ

てからかわれたりして。男子には引かれる

し、女子には吐いてんの？ って言われる

し。だから、少食のフリするようになった



んだ」

未羽「そうだったんだ。ごめん、私何も知らないで……」

衣織「ううん。普通、理解できないもん。でも、大丈夫って言うてくれてありがとう」

未羽「私も、衣織ちゃんが大丈夫って言うてくれたから——」

都・沙耶、歩いてくる。

都「衣織、いたー」

衣織「どうした？」

都「みななでご飯行こうって話してたじゃん？ お店どうするーって」

都、未羽をチラッと見る。

都「あー、ごめん桐野さん。桐野さんは誘ってないんだけど、別に仲間外れにしたいってわけじゃなくて。（沙耶に）ね？」

沙耶「そうそう。誘っても来ないかなって思ってたから」

未羽「あ……」

都「まあ、ね。別に無理に全員と仲良くする

必要ないと思うし」

衣織「いや未羽ちゃんは――」

未羽「――私、みんなと仲良くなりたいたい！」

都・沙耶、驚く。

未羽「お昼とか、その、ちょっとあれだったんだけど、みんなと話したくないとかではなくて、その」

都「……よかったー！」

未羽「へ？」

沙耶「いやうちらずっと桐野さんと仲良くなりたかったんだよね。でもしつこくしたら迷惑かなとか思って遠慮してたんだ」

都「桐野さんも行こ！ 嬉しー」

未羽・衣織、目を合わせて微笑む。

○カフェ・店内（日替わり）

会食恐怖症のオフ会が行われている。

陸「じゃあそのサークルの集まり行くんですか」

未羽「はい。そういうのから逃げちゃった

んですけど、みんなと仲良くなりたし、  
参加させてもらおうかなって」

はろ「どうしても会食の機会を避けがちな  
んだけど、逆にどんどん行った方が良くなる  
んだよね」

未羽「（頷いて）友達にお昼一緒に食べても  
らってるんですけど、緊張せずに食べれる  
ようになってきたし、大丈夫かなって」

陸「でも未羽さん。焦らないでくださいね」

未羽「（よく分かってないが）はい」

○居酒屋・店内（夜）（日替わり）

盛り上がっている男女グループ。

沙耶「写真撮ろ、写真」

衣織「いいねー」

衣織、チラッと隣の席の未羽を見る。

落ち着かず笑顔が引きつっている未羽。

未羽の向かいの席に座っている柗真。

柗真「おいしいね」

未羽「う、うん……」

未羽の前には、まだ食べ終わっていないサラダや小鉢が並んでいる。

柊真「あの、未羽ちゃんて甘いもの好き？」

デザートがおいしかったところ見つけて。

あ！ただ共有したかっただけだから気にしないでほしいんだけど」

店員、入ってきて料理を並べる。

都「おいしそー！」

盛り上がる一同。

店員、食べ終わった皿を回収していく。

未羽の前の皿を見て手を引っ込める。

店員「失礼しました」

未羽「すみません……」

箸を持つ手が震えている未羽。

都、未羽を見て、

都「あー……。あんまおいしくなかった？」

未羽「ううん！　そういうわけじゃ」

都「ごめんね、無理に誘っちゃって」

沙耶「全然無理しないで残しちゃっていいよ。

具合悪くなってもあれだし」

柗真「もったいなくない？」

小さく息を呑む未羽。

都「いいじゃん、別に。桐野さんも少食だし」

柗真「でも作ってくれた人もいるわけだし。

ちよつとでいいから食べたなら？」

都「いいてー」

未羽、呼吸が乱れる。

衣織「……」

衣織、未羽の前の皿を取り、どんどん

食べ始める。

都「衣織？」

ぽかんと口を開けて見ている一同。

あつという間に未羽の分も食べ終えた

衣織。

未羽「衣織ちゃん……」

一同、シンと静まり返っている。

衣織「テッテレー！ 実は私めっちゃ大食い

でしたー。あは、あはは……」

都「衣織……。すご！」

一同、盛り上がり始める。

沙耶「そんな食べれたんだ！ 早く言ってよ

ー！」

女子学生「気持ちいい食べっぷりだったね」

男子学生「あれだ。大食い動画とか始めた

ら？」

衣織「みんな、引いてないの？」

都「え、なんでよー」

沙耶「そんなくらいで引かないって」

衣織、笑顔になって未羽を見る。

未羽、微笑み返す。

未羽「（表情が暗くなって）……」

### ○繁華街（夜）

並んで歩いている未羽と衣織。

未羽「ごめん、衣織ちゃん。私のせいで……」

衣織、ニコツと笑って、

衣織「ううん。いっつも食べれないのにみんな

なと同じ料金払って、損した気持ちだった

んだよね。だから、よかった」

未羽、うつむく。

衣織、未羽の顔を覗き込んで、

衣織「そんな落ち込まないでいいよ。今日はたまたま調子悪かっただけで。ほら！隣に柗真いたからじゃない？」

未羽「ずっとこのままだったら？」

衣織「そんな、ずっとってことないよ。大丈夫だよ」

未羽「ありがとう……。でも、自分がみんなと食べれるようになる想像がつかないんだよ。ね。こんなんじゃないつまで経っても……」

衣織「……柗真にも言ってみたら？ 会食恐怖症のこと」

未羽「分かってもらえないと思う」

衣織「分かってもらえるかもしれないじゃん」  
未羽、衣織を見る。

衣織「私は、本当のこと言ってよかったなって思ってる。やっと、みんなと一緒に食べれた」

衣織、微笑む。

未羽「……うん」

○大学・中庭（日替わり）

未羽、ベンチに座っている。

柊真、歩いてくる。

柊真「未羽ちゃん」

柊真、未羽の隣に座る。

未羽「ごめんね、来てもらって」

柊真「全然。どうしたの？」

未羽「あの、ご飯一緒に行こうって話」

柊真「あ、ああ、うん……」

未羽「……行きたい」

柊真「え？ 本当に？ やった！」

未羽「行きたい、んだけど。一緒に食べたい

んだけど……」

柊真「うん？」

未羽「――私、会食恐怖症なの」

柊真「……うん？」

未羽「あの、人前だと食べられないっていう

ので」

柊真「それは、どうして？」



未羽「その……。食べ方とか見られてるよう  
な気がして緊張しちゃって。それで喉を通  
らなくなっちゃって」

柊真「そういうのがあるんだ」

未羽「うん。だから、一緒に行っても食べれ  
ないかもしれない。ごめんなさい」

柊真「えっと……。それは、俺あんま未羽ちゃ  
んをご飯に誘わない方がいいのかな」

未羽「ううん！ 違うの。誘ってもらってす  
ごく嬉しかった。でも、もしかしたら食べ  
れないかもしれないけどそれはおいしくな  
いからじゃくて。見られてると思うと緊張  
しちゃって」

ぼかんとして未羽を見ている柊真。

未羽「ごめん、私ちゃんと伝えられなくて。

でもあの……」

未羽、うつむく。

手を胸に当てて、深呼吸する。

未羽「（呟いて）大丈夫……」

未羽、顔を上げる。

未羽「あなたと一緒に食べたいです」

未羽、柗真をまっすぐ見つめて、

未羽「緊張するけど、怖いけど。……一緒に

食べたい。一緒においしいものを食べて、

話して、仲良くなりたい。林田くんと向き

合って、いただきますって言いたい」

未羽、涙目で柗真を見つめている。

柗真「……」

柗真、未羽から目をそらす。

柗真「……ごめん、ちょっと分かんない」

未羽、目を伏せる。

未羽「……うん。そうだよね、ごめん——」

柗真、立ち上がり歩いていく。

### ○同・講義室

衣織だけがいる講義室。

未羽、入ってくる。

衣織、気づいて、

衣織「未羽ちゃん」

未羽、衣織の隣に座る。

衣織、未羽をじっと見つめる。

未羽、衣織にニコツと笑ってみせて、

未羽「ダメだった」

衣織、黙って未羽の肩をさする。

未羽「そもそも、こんなこと、分かってもら

おうってというのが自分勝手だったんだよね。

ただ、自分が、分かっている人がそばにいた

ら安心するから」

衣織「そんなことないよ。……好きな人には、

分かってもらいたいよ」

未羽、首を横に振る。

未羽「でも、私ちゃんと言えた。きっと、今

までの私だったら、自分の気持ち隠したま

ま、逃げてたと思う」

未羽、衣織に微笑んで、

未羽「衣織ちゃんのおかげ。大丈夫って言っ

てくれたから、私も大丈夫って思えた」

衣織「だって大丈夫なんだもん……」

未羽「（笑って）そうだね。一人で食べてた

ら気づけなかった。ありがとう」

衣織「私も。ずっと一人でこそこそ食べない  
といけないと思ってたから。大丈夫なんだ  
ね」

未羽と衣織、顔を見合わせて笑う。

衣織「よし、食べよ食べよ。ね、食べて元気  
出そう」

衣織、バッグから大きなおにぎり三つ  
を取り出す。

未羽「うん！」

未羽、お弁当を広げる。

未羽・衣織、手を合わせて、

未羽「じゃあ——」

柗真、ドアを開ける。

柗真「いた！」

ビクツとする未羽。

柗真、駆け寄ってくる。

手にはビニール袋を提げている。

衣織、柗真を睨みつけて、

衣織「何」

柗真、未羽の前の席に座り、未羽に背

中を向ける。

未羽「え？」

柗真、ビニール袋からコンビニ弁当を  
取り出し、食べ始める。

柗真「これだったらどうかかな？」

未羽「えっと」

柗真「これだったら未羽ちゃんのこと見てな  
い」

衣織、未羽を見る。

柗真の背中をじっと見つめている未羽。

柗真「ごめん、未羽ちゃんが言ってた会食恐

怖症のこと。正直、全然分からない」

未羽「うん……」

柗真「でも、俺も一緒に食べたい」

ハッとする未羽。

柗真「見られるのが嫌なら、こうしたら食べ  
やすいかな？ どうだろうか？」

未羽、涙を流す。

未羽「（涙で声が震えて）うん……」

柗真「分からないけど、でも、分かるうとす

ることはできると思う。だから、教えてほしい。未羽ちゃんと話したい」

未羽「うん……。ありがとう」

柊真、未羽に背中を向けたまま微笑んで、

柊真「うん」

衣織、微笑んで未羽を見る。

未羽、衣織に頷く。

○同・食堂（日替わり）

昼時で混雑している食堂。

テーブル席に座っている男女グループ。

トレーを持った衣織、席につく。

衣織「よいしょ」

衣織のトレーには大ライスが乗っている。

沙耶「衣織のそれおいしそー」

衣織「でしょー？」

都「あ、未羽ちゃん！（と手を振る）」

トレーを持っている未羽と柊真、気づ

いて近づいてくる。

柊真「お待たせー」

未羽・柊真、席に着く。

未羽のトレイの上には小サイズのそばが乗っている。

男子学生1「少ない？」

未羽「まだちよっと緊張するから、無理な量にしようと思って」

男子学生「へえー」

柊真「（微笑んで）ね」

未羽、微笑んで柊真に頷く。

都「よーし、食べよ食べよ」

目が合って、微笑む未羽と衣織。

未羽・衣織「いただきます」

【終わり】